

繰り返される嘆き

エレジーとして読む、20世紀前半のイギリス戦争詩

五十嵐奈央

第一次世界大戦の従軍詩人の詩では、自身の死が差し迫った現実的なものとして意識されており、従来のエレジーにみられる詩人の自己言及性がより顕著に現れている。同時に、第一次世界大戦詩人ウィルフレッド・オーウェンは、戦争の「あわれみ」が自身の詩の主題であることを主張し、それらの詩を特に説明もなく「エレジー」と呼びながら、通常エレジーが与えるはずの「慰め」を与えないと述べている。第一次世界大戦の戦争詩は、悲しみを表現し、その克服方法を模索・提示する形式から、悲しみの源泉を徹底的に掘り起こし白日の下に晒したうえで、悲しみやその源泉に感じるやるせなさ一時に怒りを表明する形式へと、エレジーを変容させたとも言える。しかし、第一次世界大戦後に書かれたイギリス詩では、当事者による悲しみとの徹底的な対峙と慰めの拒否、という図式に当てはまらない形でエレジーを変容させる動きがあったことがわかる。本発表では、第二次世界大戦期のイギリス詩における戦争と戦争詩の「繰り返し」に対する認識とその克服の諸相を概観し、エレジーの一形態としての戦争詩の特徴について考察を試みた。

同じこと（戦争）が繰り返される絶望が社会全体を襲った第二次世界大戦勃発後、先の大戦に従軍し生き延びたハーバート・リードは、「1940年の徴集兵へ（“To a Conscript of 1940”）」において、接頭辞“re-”で始まる単語を多用しながら、戻るべきものは戻らず、元に戻る可能性を備えているものも今は異常な状態にあることを示している。「オード（“Ode Written During the Battle of Dunkirk, May, 1940”）」でも、人間の良心を唯一の信仰対象とする「我々（“we”）」が、新たな戦争を前にして感じた、彼ら自身の神の喪失とも言うべき人間への失望に焦点をあてている。戦争のみならず、戦争に対する嘆きも「再生産」されてしまっていた当時の状況を踏まえてリードは、「反・慰め」の代表的詩人であるオーウェンの詩「無感覚（“Insensibility”）」内の表現（“Happy are...”）を「オード」の中で再生産することで、二度目の大戦における「慰め」の不在を改めて強調している。

第二次世界大戦の従軍詩人キース・ダグラスも、戦争および戦争詩の「繰り返し」への不安を表明しながら、独自の詩の確立を模索した詩人である。1943年5月のエッセイでダグラスは、「地獄は二度放たれない、それは第一次世界大戦で放たれ、今あるのは同じ地獄である。」と述べ、先の大戦と比べて新しいことは何もないので、戦地にいる現代詩人の書く詩ほとんどが、「同語反復的（“tautological”）」になるだろうと推測している（Prose 119-20）。彼自身の新しく特異な戦闘経験にもかかわらず、「砂漠の花（“Desert Flowers”）」でダグラスは、第一次世界大戦詩人のアイザック・ローゼンバーグに語りかけ、戦争詩人としての自分が先行詩人の言葉を「反復」するだけの存在になることを危惧している。しかし後半、詩人は、自身の経験がありきたりであるか否かにかかわらず、それに対して目を開いておかなければならない立場に置かれていることを明かし、運命をただ嘆く代わりに、コインを入れると動く機械のように自身の舌を動かし、誰も目を向けたことのない経験を詩に書く決意を表明している。この詩においてダグラスは、自身の散文や詩の前半で述べていた、戦争詩人としての一見弱気な考え、つまり戦争とその反復の「どうしようもなさ」に対する認識を、詩作の原動力に変えようとしているのである。

二度目の戦争における「慰め」の不在と「繰り返し」を克服する必要性は、同時期の非戦闘員の詩人の作品でも異なる形で表現されている。ルイ・マクニースの「徴集兵（“The Conscript”）」では、若者たちへの負債（先の戦争の影響）の押し付けという主題がより大きな時間的文脈の中で描かれている。詩の中の徴集兵は、これまでの歴史で人類が何度も直面してきた人間存在そのものの無力さの象徴である。しかし詩人は、受動的で「選択肢のない（“Choiceless”）」（224）兵士の様子を示しながらも、命／人生に対する兵士の主体性に言及している。この詩には、全ての人間が否応なく歴史の一部になることが運命づけられているとしても、一つ一つの決断や行動を作るのはあくまでも各個人である、という、「自由契約者（“free agents”）」（Longley 130）としての人間の個別性や意志を尊重するマクニースの信条が反映されている。

負の状況下でさえ否定できない人間の尊厳の普遍性に目を向けさせるマクニースの戦争詩は、「嘆かない」エレジーと呼ぶことができる。そして、同時期の他の詩人たちにも、戦争によって制約を受けた生のなかに肯定的な価値を見出そうとする姿勢がみられる。「1939年9月1日（“September 1, 1939”）」においてW. H. オーデンは、マクニース同様、歴史の一部にすぎない人間の悲哀を伝えている。しかし、詩の終盤では、愛や正義の重要性に触れ、自身の詩で「肯定の炎を見せる（“Show an affirming flame”）」（247）意欲を示している。この詩は、これまでの短い平和に別れを告げ、迫り来る危機に向かう悲嘆の要素を含んでいるが、「恐怖と希望を

内包して」(O'Neill 846) いるオーデンの政治詩の一つであり、オーデンの「肯定する必要性を肯定している」(848) 側面も併せ持っている。たんなる理想主義に走っているようにも思えるオーデンやマクニースの第二次世界大戦詩は、マクニースの戦争詩を論じたテレンス・ブラウンやピーター・マクドナルドの言葉を借りれば、「死の事実の認識」(Brown 176) のもとで書かれており、「喪失、破壊、不安定さの現実から引き出された肯定(“affirmation”)のパターン」(McDonald 393) であると言える。それゆえ、エレジーしか生まれ得ない状況下で書かれた、エレジーの一種の発展型とみなすことができる。

悲しみを感じさせる出来事は通常、悲しみの度合い(深さ)においてもその種類(失われたもの、死者)においても、他のいかなる喪失とも比較できない、特別なものである。第一次世界大戦の詩は、兵士の死とその悲嘆が「一度きり(“never again”)」(Winter 251) のかけがえのないものであることを訴えながら、その「一度きり」の悲しみを「一度きり」にするために書かれたエレジーであったと言える。しかし、再び起こった大戦により、「一度きり」だったはずの犠牲や嘆きも繰り返され、再生産されざるを得なくなった。第二次世界大戦中に、嘆かれるべき状況を認識しながらも「嘆かない」詩が書かれたのは、悲しみだけでなくその表現も回復されてしまうことへの危機感が感じられていたためであり、詩が普遍的希望を示すことに対する肯定的な態度は、社会における詩の役割という、戦間期以降、特に再考が求められていた問題に対する詩人たちの一つの回答と捉えることもできる。

引用文献

- Auden, W. H. *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings 1927-1939*, edited by Edward Mendelson, Faber and Faber, 1986.
- Brearton, Fran. “‘But that is not new’: Poetic Legacies of the First World War.” *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War*, edited by Santanu Das, Cambridge UP, 2013, pp. 229–41.
- Brown, Terence. “Louis MacNeice and the Second World War.” *Modern Irish Writers and the Wars*, edited by Kathleen Devine, Colin Smythe, 1999, pp. 165–77.
- Douglas, Keith. *The Complete Poems*, edited with a preface by Desmond Graham, and introduction by Ted Hughes. 3rd ed., 1998. Faber and Faber, 2000.
- . *A Prose Miscellany*, compiled and introduction by Desmond Graham, Carcanet Press, 1985.
- Longley, Edna. *Louis MacNeice: A Study*. Faber and Faber, 1988.
- MacNeice, Louis. *Collected Poems*, edited by Peter McDonald, Faber and Faber, 2007.
- McDonald, Peter. “Louis MacNeice’s War.” *The Oxford Handbook of British and Irish War Poetry*, edited by Tim Kendall. 2007. Oxford UP, 2009, pp. 377–97.
- O’Neill, Michael. “Auden, Day Lewis, MacNeice, Spender: the thirties poetry.” *The Cambridge History of English Poetry*, edited by Michael O’Neill. 2010. Cambridge UP, 2015, pp. 844–57.
- Owen, Wilfred. *The Collected Poems of Wilfred Owen*, edited by C. Day Lewis, New Directions, 1965.
- Ramazani, Jahan. *Poetry of Mourning: The Modern Elegy from Hardy to Heaney*. U of Chicago P, 1994.
- Read, Herbert. *The Contrary Experience: autobiographies*. Horizon Press, 1963.
- . *Selected Poetry*. Sinclair-Stevenson, 1994.
- Winter, Jay. “Beyond Glory: First World War Poetry and Cultural Memory.” *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War*, edited by Santanu Das, Cambridge UP, 2013, pp. 242–56.